

絃友会便り

名渡山兼一と絃友会をご支援くださる皆様へ近況報告、

絃友会便りをお届けします。

2017.6.14 No.121

絃友会事務局・新谷 真由美 <http://www.genyu-kai.com>

テレビ神奈川・LOVEかわさき(4月29日放送)



市内の話題や人・場所を訪ね、川崎市の魅力を伝える情報番組で、今回のテーマは「川崎で沖縄を感じよう」。

川崎沖縄県人会比嘉孝会長と共に4月26日スタジオで収録、「だんじゅかりゆし」を歌ってきました。

写真後列▷司会・敦士さん、アシスタント・久本真菜さん、レポーター・石原あつ美さん

第14回はのさいFESTA

毎年ゴールデンウィークに開催されるはいさいFESTA、音楽・映像・伝統芸能・食・酒・・・複合商業施設ラチッタデッラが沖縄一色に染まります。

私たち絃友会は5月6日・噴水広場で演奏して参りました。

暑い時期、野外で三絃の皮がパンと音を立てて切れてしまった年もありましたが、お客様との距離が近く、心のキャッチボールをしているかのような想いに浸れる貴重なステージです。



国立劇場小劇場『祝いの宴』



神奈川県・川崎市両指定無形民俗文化財

「川崎沖縄芸能研究会」の公演が第80回を迎えるにあたり開催された特別記念公演。

所属する三絃・箏・笛・太鼓・胡弓・舞踊の各研究所が総力を挙げ、幕開け斉唱・古典舞踊・雑踊・創作舞踊をお披露目し、まみどーまで終演いたしました。

絃友会は大劇場でエイサーや演奏を過去に経験していますが、小劇場は初めてでしたので貴重な経験をさせて戴きました。

(写真は2回目の通しリハーサル)



楽屋が同じだった大城康彦研究所の皆さんと、大城先生や名渡山先生の話で盛り上がり、リハーサル2回と2時間半の本番の合間に記念撮影。

「豊節」の地謡をさせて戴いた砂辺美智子舞踊研究所。何か月も前から心を合わせて学びあってきただけに、本番が終わり安堵の笑顔・・・でも事務局の手振れで写真がボケてしまって残念です。



女性師範・教師の割り当てで「梅の香り」の地謡を務めた陽子さんと恵子さん、初めて着るクルチョウ・ハチマチが良く似合っていました。

名渡山研究所は、佐久川昌子舞踊研究所の「くば笠小」の地謡もあり慌ただしい一日でした。

今年は創作舞踊の地謡が多く勉強することが山積みですが、新しい曲を名渡山先生に指導して戴けることは私たち会員にとりまして大きな喜びです。



『祝いの宴』が終わり、私たちは11月の宮城タケ舞踊研究所「本部ゆがふ島」の地謡稽古に励んでいます。

事務局のつぶやき・・・

名渡山先生が川崎から沖縄に向かい三絃を奏で想いを歌い50年、その姿を見続けてきた私が歌・三絃を学び始めて40年・・・川崎沖縄芸能研究会の歴史のごく一部ですが決して平たんではなかった諸先輩方の努力を見たり聞いたりしてきました。

名渡山絃友会の活動が市内外で盛んになるにつれ、なぜ川崎で沖縄?という質問度々受け・・・そのかわりは大正時代まで遡るといふことや、終戦後しばらくの間舞踊の大家や三絃の大家が川崎に滞在したことで今日の発展につながったこと、川崎市の皆様に多くの支援を戴いたことを知りました。ですから、絃友会はイベントプログラム解説に必ずその歴史を記載し紹介しています。

川崎沖縄芸能研究会第80回特別記念公演パンフレットをめくってみて・・・あゆみの中に古い公演実績や歴代会長名はありましたが、その成り立ちにかかわった先達のことにも触れてほしかったと残念に思っています。

直接芸能研究会に係らなかったかも知れませんが、大正時代、阿波連本啓先生が川崎で沖縄舞踊を教えたことがその土壌をつくったのではないのでしょうか・・・昭和20年代に組踊を上演できた陰にはそれに通じた先達がいたはずです。自由に行き来することのできない時代、カセットもビデオもなかった時代に邁進した先達と、それをこの地の芸能文化として育み続けて下さった川崎の人々の懐の深さを伝えるページがあったら良かったのにと思っています。

ありがたいことは、三隅治雄先生の祝辞に経緯やそれぞれの想いが記されておりますこと・・・三隅先生に心より感謝申し上げます。